ペスタロッチー・フレーベル学会　課題研究
関東地区第７回　研究発表会報告

出席者
小田倉泉、駒木根剛、岸信行、佐久間裕之、中島朋紀、黛幸一郎　湯川嘉津美

欠席者
豊泉清浩、鳥光美緒子

研究発表者と題目
黛　幸一郎　「子供の育ちに大切なこと」
湯川　嘉津美「幼稚園と家庭教育の関係をめぐる歴史的考察」

関東地区第第７回研究発表会は、2012 年 01 月 28 日（土)、中央大学理工学部で開催された。
発表は、まず、新たに加わった黛会員が、「子供の育ちに大切なこと」という題で、さまざまな研究者が子どもの発達過程で何を大切に考えているかということについての発表の後、現状の子どものさまざまな問題を指摘しながら、 今後の幼児教育の大切さについて見解を述べられた。黛氏は、将来幼稚園を開設したいという希望をもっているので、そのことについても述べられ、そのあと、出席者からの感想と、これからの「子育て支援」の在り方など、多方面にわたる議論に発展した。

中間の懇談で、司会の岸から学会のホームページを通じて課題研究「子育て支援」に参加希望のある玉川大学卒業の駒木根 剛会員の紹介があり、本人から自己紹介があった。「ヘルバルトを中心に研究して来たが、ペスタロッチーやフレーベルの幼児教育にも興味があるので、参加したい」旨の希望が述べられた。

懇談の後、二番目の発表となる、湯川会員による「幼稚園と家庭教育の関係をめぐる歴史的考察」と題する発表が行われた。幼稚園が明治以降どのように日本に定着するようになったかを、詳しい資料をもとに精緻に整理されたレジュメをもとに、大変に分かりやすい説明がなされた。
特にフレーベルの思想がアメリカでデューイなどのプラグマチスとたちにより批判されたいきさつが説明され、それとは別にドイツから直接的に移入された部分もあり、日本の幼稚園は、アメリカ経由のものとドイツからの直接的なものとが、どう関係をもちながら成立していったのか、とても興味ある発表がなされた。参加者からも、歴史的な認識の大切さが理解できたという感想が述べられた。
主として黛会員は、現在の子どもの問題点から、幼児教育の在り方が問題にされ、湯川会員は歴史的な変遷のなかで、日本の幼児教育がどのような流れを経て現在に至っているのかを跡付けた研究であったので、総合的な討議では、これからの「子育て支援」の在り方をめぐる問題にまで広く議論が及び、充実した研究会となった。午後５時頃に閉会そた。

次回の研究発表会の予定は、次の通り
日時: ２０１２年０４月 28 日(土)　PM14:00～17:00
場所:中央大学理工学部６号館８階、人文社会教室会議室（6814 号室）
発表予定者・発表題目
駒木根　剛「子育て支援の時代におけるペスタロッチーの意義について」
岸　信行「フレーベルの幼稚園創設の精神」